

小澤征爾カーネギー公演 矢部雅之

昨年十二月十四日午後。ニューヨークは氷点下六度と冷え込んだが、カーネギーホール裏口には、マエストロ・オザワこと小澤征爾氏の楽屋入りを待つ何人ものファンの姿があった。アメリカでの彼の人気の高さが窺えた。

一月に食道ガンが見つかり音楽活動を休止した小澤氏にとって、この、カーネギーホールでのサイトウ・キネン・オーケストラとの3連続公演が事実上の復活公演と見なされていた。だが直前に、故武満徹氏の「ノベンバー・ステツプス」等、公演予定曲の一部の指揮者が下野竜也氏に変更された。公演初日前日に予定されていた公開リハーサルも小澤氏の発熱と腰痛のため急遽キャンセルに。本当に完全復活を遂げられるのか。観客も関係者も期待と不安を抱きながらの公演初日だった。

初日に小澤氏が指揮したのはブラームスの交響曲第一番。満場の拍手を受けつつ登場した小澤氏が、手摺り付きの横長の椅子の置かれた、ちよつと奇妙な雰囲気の指揮台の上ののぼる。第一章の入りは若干早目と思われるテンポ。全体的にもきびきびとした早めのペースで進行しつつ、以前の小澤氏に時折感じられたような堅い印象は無く、柔軟でどこか明るいブラームスに自然と引込まれる気がした。指揮台上の椅子にはたまに腰を下す程度で、伸び上ったり屈んだり、全身でオーケストラをひっぱるエネルギーギッシュな指揮ぶりが健在で嬉しい。正味四十五分ほどの演奏の終了後、疲れた表情の小澤氏へのスタンディングオベーション

はおよそ六分間続いた。

二日目に小澤氏が指揮をとったのは、ベルリオーズの幻想交響曲。変化に富んだ曲が楽しく、選曲的にも、形式を重んじた、同時代のブラームスとの好対照が面白かった。

そして公演最終日。普段客席からは、指揮中の指揮者の後ろ姿しか見られないが、この日私は、指揮する小澤氏の表情を、舞台下手袖の上にある撮影用のスペースから目にする機会に恵まれた。小澤氏は、ある時は目を閉じ、次の瞬間にはその目をカッと見開く。口も、合唱の歌詞に合わせて動かしていたかと思うと、急に、拳が入りそうなほど大きく開いたり、時には舌まで出したり。その表情の豊かさは、失礼ながら、常人の域を通り越し、音楽の靈に憑かれているかのようだ。狂気と紙一重の迫力も大オーケストラを操る大きな力なのだろうと改めて感じた。

この日の演目はブリテンの「戦争レクイエム」。演奏所要時間約一時間半の大曲だ。開演前の小澤氏は、少しでも体調を整えるべく、会場入り後も、控室の個室に備えられたベッドに開演直前まで身を横たえていたと言う。指揮台上の椅子に腰を下す頻度も、初日二日目に比べると多めに感じられた。だが、多くの人の思いが関わるオーケストラの演奏ではそんな危機的状況も時としてプラスに作用するのかも知れない。最終楽章では、腰痛を抱えた体を捻り、階上の客席に配置された児童合唱団へも指示を送りながら、見事な出来で演奏しきった小澤氏に、総立ちの聴衆は十分間近く拍手を送り続けた。

贅沢を言えば、二日目の予定演目にあった、小澤氏と交流の深かった故武満徹氏の「ノベンバー・ステツプス」は是非小澤氏の指揮で聴きたかった。だがこれは次回の楽しみにとっておこう。マエストロ・オザワ、私達はあなたの演奏をまだまだ堪能したいのです。